サザエの標識放流結果について

俵　正夫・渡部俊明

は　し　が　き

本県中山地区は、県中部に位置し、地先海域では、転石からなる天然礁が発達しており、当域の磯根資源を対象とする漁業が盛んである。今回は磯根資源の重要種であるサザエの標識放流を実施したので、その結果を報告する。

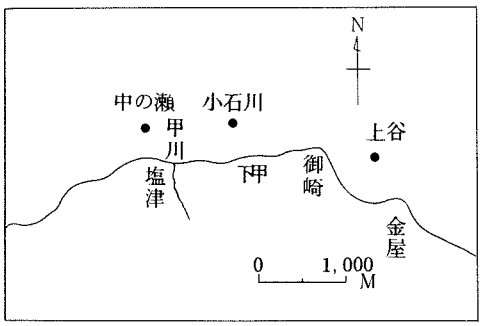

図１　放流位置図

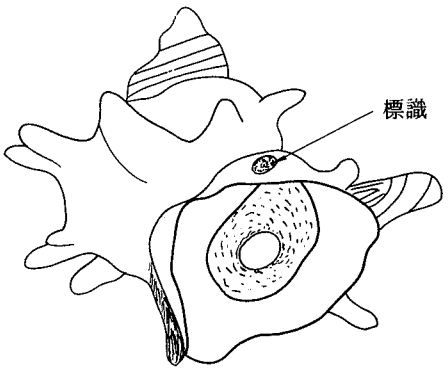

図２　標識の位置

方　　法

中山地先において、1978年８月16日に潜水により採集した651個体のサザエに水中ボンドを使用して図２のように外唇部近くの殻表に標識をつけた。標識は長径７㎜、短径４㎜、厚さ１㎜のプラスチック製楕円盤を使用した。

標識した個体は、殻長及び棘数を調べ1978年９月22日に中山地先の通称中の瀬（水深７～８ｍ）、小石川（７～８ｍ）、及び上谷（10ｍ）にそれぞれ280、151、220、計651個体放流した。

結　　果

放流した３ケ所のうち、上谷瀬に放流した220個体中23個体が1979年８月２日～３日に刺網によって再捕された。再捕地点は放流地点とほぼ同一であり、放流後の分散は少ないものと推定される。

上谷瀬に放流した 220 個体の殻長は最高 7.0 *cm*、最低 4.2 *cm*、平均 5.51 *cm*で、猪野（1953）及び宇野（1962）の分類によって分けると、棘のないもの（O型）8個体（3.6％）、第Ⅱ隆起線上のみに棘のあるもの（A型）87個体、第Ⅱ及び第Ⅳ隆起線上に棘のあるもの（B型）125 個体（56.8％）、第Ⅳ隆起線上のみに棘のあるもの（C型）0個体であった。

再捕された23個体の放流前及び再捕時の殻長並びに棘数を表 1 に示した。但し、番号の判読不能な 4 個体については、殻口部位に形成された休止帯によって放流前の棘数を判断した。

再捕個体の放流前の殻長は、最高 6.1 *cm*、最低 5.2 *cm*、平均 5.53 *cm*で、再捕時の殻長は、最高 8.5 *cm*、最低 7.6 *cm*、平均 7.96 *cm*であった。

再捕個体の放流前後の棘数の変化をみると、無棘であった 3 個体はすべて有棘となりO型→A、B、Cと変化し、A型はすべてB型となった。

表 1　放流前後の殻長及び棘数

No.	放流前			放流後			備考
	殻長	棘数		殻長	棘数		
		Ⅱ	Ⅳ		Ⅱ	Ⅳ	
1		4	—	8.3	10	3	No. 1. 7. 8. 10の個体は標識番号判読不能
2	5.8	10	4	7.8	14	8	
3	5.1	4	3	7.3	10	9	
4	5.0	6	—	7.8	8	3	
5	5.6	11	4	7.8	14	9	
6	5.4	8	2	7.8	14	8	
7		7	—	8.2	11	5	
8		6	1	8.2	11	7	
9	5.7	7	3	8.1	10	8	
10		11	1	7.5	17	7	
11	5.3	—	—	7.9	6	—	
12	5.8	7	2	7.8	12	7	
13	5.6	—	—	7.9	—	6	
14	5.5	10	2	8.1	15	7	
15	5.2	6	3	7.7	10	9	
16	5.6	10	3	7.9	16	9	
17	5.3	9	3	7.6	14	8	
18	6.0	8	5	8.5	14	9	
19	4.9	9	—	7.8	13	8	
20	6.1	9	5	8.1	11	9	
21	5.9	8	—	8.4	15	5	
22	5.7	11	4	8.1	14	10	
23	5.6	—	—	7.8	2	5	

要　　約

1）中山地先においてサザエの標識放流を実施した。

2）1978年9月22日に標識放流した651個体のうち1979年8月2、3日に23個体が再捕された。

3）放流地点と再捕地点はほぼ同一地点であった。

4）再捕個体の放流前後の平均殻長は5.5→8.0 *cm*であった。

5）無棘の個体O型は有棘（A、B、C型）となり、A型はすべてB型となった。

文　　献

1）猪野　峻（1953）サザエの生物学的研究－Ⅰ、環境の相違による棘の消長、日水誌19(4) 410－414

2）宇野　寛（1962）サザエの増殖に関する基礎研究、東京水産大特別研報6(2)